2021年度の採択いただいた助成など

2021年4月～9月：中央共同募金会withコロナ
2021年度：一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団
2021年度：一般財団法人カゴメみらいやさい財団
2021年7月～12月：むすびえ・こども食堂基金
2021年9月～2022年3月：社会福祉法人 読売光と愛の事業団
2021年9月～2022年8月：NPO法人モバイル・コミュニケーション・ファンド
2021年9月～2022年3月：高松市つながりの場づくり緊急支援事業
2021年11月～2022年12月：一般財団法人チャイルドライフサポートとくしま
2022年1月～2022年3月：むすびえ・こども食堂基金

決算報告

［収入の部］

民間助成金	5,060,000円
公的補助金	1,097,350円
受取寄付金	491,291円
受取会費	20,000円
合計	6,668,641円

［支出の部］

人件費	1,126,100円
その他経費	4,336,602円
合計	5,462,702円

メディア掲載など

〈 2021年 〉
7月23日　NHK高松
7月22日　ケーブルメディア四国
8月31日　NHK高松
8月31日　KSB瀬戸内海放送
9月6日～　ケーブルメディア四国
9月29日　読売新聞香川県版
10月22日　NPO法人わがこと「わがことマガジン」
10月29日　リビング高松
10月18日　四国新聞
〈 2022年 〉
1月28日　読売新聞
1月29日　読売新聞
2月8日　NHK高松

KSB瀬戸内海放送（2021年8月31日放送）

読売新聞（2022年1月28日掲載）

マンスリーサポーター様も募集しています

ももものサポーターになりませんか？

ここまでお読みいただきありがとうございました。これからも様々な背景に育つ子ども若者が未来に希望をもつことができる社会の実現に向けて精進してまいります。みなさまからいただいたご寄付は居場所づくりの拡充や多様な学びの機会づくり、相談・訪問・同行支援、緊急時にかかる支援などに使わせていただきます。

銀行振込によるご寄付

［金融機関 ］百十四銀行 太田支店
［口座番号 ］普通口座　0825068
［ 名　義 ］イッパン（シヤ）モモ

インターネットからのご寄付

Syncable（シンカブル）の
決済システムを利用しております。

【団体概要】

正式名称	一般社団法人もも
所在地	香川県高松市太田上町1287-6
代表理事	伊澤 貴大
理　事	真鍋 康正
理　事	和栗 雄太
共同創設者	伊澤 絵理子

法人資格取得	2020年8月31日
活動開始日	2018年7月25日
有償スタッフ	8名

TEL：087-899-5340
MAIL：manabiyamomo@gmail.com
https://manabiya-momo.jimdofree.com

まなびやもも 2021

— anuual report —

一般社団法人もも 2021年度事業報告書

まなびやもも

VISION ビジョン

生まれ育つ環境に左右されず
自分の未来に希望が持てる社会

MISSION ミッション

子ども若者が
安心して力を発揮できる
地域のプラットフォームをつくる

活動の方向性

地域住民・企業・学校などと協働し、活動に参画していただき、子ども若者が経済的なハードルを越えて地域資源を最大限有効活用できる状態を目指します。

事業の目的

不登校や不登校経験者など生きづらさを抱える子ども若者や学校・家庭以外の居場所を必要とする子ども若者に対して、地域で居場所支援・学習支援・暮らし支援・相談支援などを行い、社会的自立に寄与します。

代表あいさつ

一般社団法人ももの活動を応援し支えてくださっているすべての方々に心から感謝申し上げます。

不登校のこどもたちに向けた居場所づくりから始まった当法人には、発達障害や経済的困窮、ヤングケアラーや精神疾患、ステップファミリーなど様々な背景に育つこどもたちが集まるようになりました。教育支援に加え、今では食や生活などの暮らし支援、個別相談や訪問・同行などの相談支援など包括的なこども若者支援に取り組んでいます。それらはこどもたちと出会う中で感じる必要性から生まれた取り組みがほとんどです。

不登校児童生徒数や虐待件数、子ども若者の自死数は年々増加傾向にあります。子どもたちの孤独や孤立を防ぐために、私たちは、どんな背景に生まれ育つこども若者も豊かな社会資源にアクセスする事ができる「小規模多機能コミュニティ」の創造を目指しています。少人数でほっとできる家庭的なあたたかい場を。ごはんを食べるついでに相談ができるソーシャルワークハウスを。五教科にとどまらない自由で多様な学びの場を。若者が地域住民と取り組むチャレンジの場を。こども若者とおとなが一緒になって創り出す、そんな情景を目指しています。

こどもたち一人ひとりが持つ力って本当にすごいなと感じさせられることばかりです。そしていつも地域の方々に支えていただき、私たちだけではできなかったようなことを実現していくことができてきました。本当にありがとうございます。

これからもすべてのこども若者が安心して力を発揮できる地域のプラットフォームをつくるために邁進してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

代表理事　伊澤貴大
共同創設者　伊澤絵理子

2021年度のハイライト

2021年度の活動実施回数 のべ **340回** ／ 利用者数 のべ **2275名**

6月

文化芸術ゼミ

どんな背景に生まれ育つ子ども若者にも、文化的体験の機会を地域のなかでつくることを目指した文化芸術ゼミ開始

7月

みんなでつくるもものバーDITワークショップ

子ども若者とおとながともにつくる「子どもも立ち寄れるバー」プロジェクト始動

8月

ショートステイ、訪問支援、同行支援開始

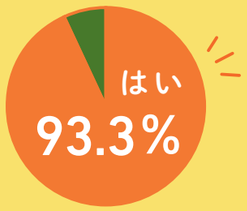
様々な事情で家にいることがしんどい子ども若者が利用できる短期宿泊や訪問・同行支援を開始

9月

学習会開始

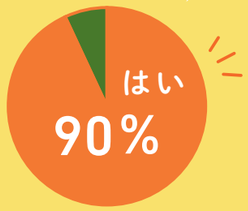
不登校や不登校経験者を中心に学びなおしの機会をつくる学習会を開始。通信制高校へ進学した後も通い続けることができる学習の場

アンケート



まなびやももを利用して前向きな変化があったと思う

周りに言っても理解してもらえなかったことが理解されたのは初めてでした。



自分の気持ちや考え、好きなことを話す・表現する機会は増えている

居場所づくり支援事業

居場所づくり活動 〈毎週金曜日 14時～16時〉

年間開催回数 48回 ／ のべ参加者数 263名

学校に行きにくい、またはその傾向のある
10代から20代前半の子ども若者が集うコミュニケーションの場

ひきこもりがちな子ども若者が家の外に出る練習として利用するケースや、社会福祉サービスを利用する前段階の他者との交流の場として利用するケースが見られました。
日中の時間帯の居場所では、落ち着いた雰囲気が心地よく利用しやすいという声がありました。発達障害やその傾向があり、聴覚過敏や大人数が苦手な子ども若者も来所しやすい、少人数の場づくりをおこなっています。

新たな取り組み

活動できる部屋の増設
途中で休憩したり、クールダウンをしたり、プライバシーを守って話したりするなど、臨機応変な個別対応ができるようになりました。

静養室の増設
ベッドを2台設置した静養室を作り、一時的に横になり休息ができるようになりました。ベッドの組み立ても子どもたちと取り組みました。

スポーツ・レクリエーション活動

年間開催回数 10回 ／のべ参加者数 104名

体を動かすことでコミュニケーションの機会を創出

卓球やダンス、バドミントンなどスポーツやレクリエーションをおこないました。新型コロナウイルスの感染状況により、屋内でのスポーツ等は一時中止を余儀なくされましたが、近隣の公園に行き、バドミントンやなわとびで体を動かしたりしました。学校や家庭で体を動かしたり、他者とスポーツやレクリエーションをおこなったりする機会が減少している傾向があり、参加者からは、「久しぶりに体を動かしてとても楽しい。」「一人ではスポーツはできないのでおもしろい。」などの感想がありました。

PICK UP

ものバー

地域住民とつくる居場所づくりプロジェクト

支援する側・される側という立場を感じさせないみんなの居場所

中学卒業とともに新しいコミュニティに移行していく子どもたちもいます。いつのまにか高校を中退していたり、アルバイトが続かず悩んでいたり。10代後半の若者も気軽に通える居場所をつくりました。

2021年4月～7月

離れの掃除やワークショップの実施 のべ協力者数 102名

「相談の敷居をさげること」を目的に当団体の敷地内にある離れを、子どもも立ち寄ることができるバーに改装しました。古い離れの掃除や内部の解体などには、地域の方々も協力していただきました。また、カウンターテーブルや扉などの作成や塗装をおこなうワークショップを夏休みの2日間をかけておこないました。その日の夕方には、完成を祝う夕焼けコンサートを開催し、協力してくださった地域の方々や子どもたちとその家族など多数の協力者が集まりました。
離れの改修に関して延べ100名以上のボランティアの方々に協力いただきました。

2021年8月31日

子どもも通えるバー “momonobar” OPEN

祝！OPEN

正式なオープンは2021年8月31日に。夏休み明けに子どもの自殺者数が増えることから、夏休み中にバーをオープンし、一人でも多くの子ども若者が立ち寄ることができる、かけこむことができる場にしました。

2021年8月～2022年3月

本格始動 〈毎週火曜日 17時～20時〉

開催回数 18回 ／ のべ参加者数 98名

ものバーは、誰でも利用することができ、子ども若者は軽食や飲み物も無料です。誰かと話してもいいし、ぼーっと過ごすだけでもいい。自分が心地よいと感じる方法で利用できる場所にすることを目指し、ほどよい距離感で話を聞いたり見守ったりするスタッフやボランティアがマスターとしてあたたかく出迎えます。

教育支援事業

学習支援教室〈月3回月曜日〉

開催回数 21回 ／ のべ参加者数 62名 （2021年9月～2022年3月）

子どもとの関係性の構築に加え、
5教科や日々の学習のサポート、受験対策をおこなう伴走支援

高松市内には中学生対象の高校受験・進学対策を目的としている学習支援教室や無料学習会はありますが、不登校経験や傾向を持つ子どもたち、経済的困窮世帯やひとり親の家庭に育つ子どもたちを対象とした高校進学後の無料の学習支援の機会はありませんでした。高校進学は叶ったものの、環境の変化や学習についていけなくなるなど、通学を継続することが難しくなり、再び不登校状態や中途退学を余儀なくされるケースがありました。当団体の居場所づくりなどで出会った子どもたちに対して切れ目のない伴走支援をおこなうことで、学校生活や学習面での困りごと、不安に感じていることなどを気軽に話せる学びの場をつくりました。主に中学生から高校生の世代の子どもたちが利用しています。

主な活動内容

1. 関係性の構築
2. 学習カウンセリング
3. 学習支援
4. 進学・就職に関するキャリア支援
5. 食事支援
6. 余暇支援

キャリア教育・体験活動

開催回数 4回 ／ のべ参加者数 67名（2021年4月～2022年3月）

子ども若者のニーズをもとに職業講話や体験活動を開催

●体験活動1

フェリーに乗って女木島に向かい、現地の方のガイドのもとサイクリングや山登り、ビーチクリーニングを行いました。様々な形の貝やプラスチックごみを見つけました。

●体験活動2

小豆島で活動されている小豆島子ども若者支援機構ショウ'zさまへ訪問しました。子どもたち同士での交流をおこなったり、子ども若者を取り巻く環境の課題などを共有したりしました。

●ももカレッジ

児童精神科医の方をゲストにお迎えし、どのような人生を歩み、医師を志したのか、今後の希望など子どもたちや保護者の方との対話をおこないました。

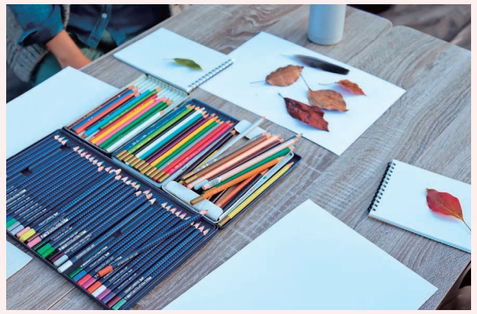
●哲学対話

キャリアコンサルタントの方をゲストに、高校生を中心とした参加メンバーで「普通ってなんだろう？」というテーマでの対話をおこないました。

PICK UP

文化芸術ゼミ

合計開催回数 6回 ／ のべ参加者数 53名
（2021年6月～2022年3月 隔月1回）



まちをみんなのキャンパスに！

美術系・芸術系の大学や専門学校への進学を希望しているが、不登校状態であることや経済的困窮状態にあることが要素となり、進学がかなわないという相談を複数の高校生や若者から受けてきました。どのような背景に育つ子ども若者にも、地域のなかに文化的教育の場がある環境を創出することで、文化芸術の経験や学びを通し、子ども若者本人が持つ可能性や力を発揮する社会につながるという仮説を立てました。
中学生から高校生、若年無業の若者、一度は進学をあきらめて就職した若者などが参加し、ワークショップや座談会をおこないました。絵を描くこと、造形物をつくることや自然の中で見つけた様々な景色を通して、自分が感じたこと、考えたこと、表現したいと思ったことなどを言語化する過程を経験しました。そして大好きなことや夢中になれること、あきらめたくないことなどを整理し、自らの過去・現在・未来のことを語れることを目指しました。様々な文化芸術の体験や講師をはじめ参加者同士の出会いを通して、新たな知的好奇心やコミュニティを育み、活躍の場をつくることができました。

2021年度の実施内容

6月	ドリームボードづくり
9月	自然の中で見つける私の秋を見つけよう（フィールドワークと作品制作）
11月	対話型文化芸術ゼミ
12月	マイカレンダーづくり
2月	春を待つ 花々を描く
3月	陶芸作品づくり

尾野さん永安さん、漫画家の先生などめったなことでは出会わないプロフェッショナルの人達から話を聞けたとき、とてもうれしかったです。陶芸教室など普段家庭では経験できないことも楽しかったです。

今後の目標

香川県高松市はアートやデザインなどにまつわる社会的資源に恵まれたとても豊かなまちです。どんな背景に生まれ育つ子ども若者にも、この豊かな資源にアクセスできる環境をつくっていきたいと考えています。「まちをみんなのキャンパスに」を合言葉に次は子どもたち主体の文化祭を企画しています！作品展示やワークショップなど、ともにつくる文化祭をお楽しみに！

暮らし支援事業

もも若者宅配便（物資郵送）

年間実施回数 12回 ／ のべ利用者数 49名

経済的困窮状態にある家庭や一人暮らしの卒業生に向けた食糧等の物資支援

経済的困窮状態にあるコロナ禍の影響を強く受けているご家庭や一人暮らしの卒業生に向けた食糧を郵送しました。お手紙や公式LINEの登録チラシを封入しコミュニケーションを取りやすくしました。コロナ禍で仕事が減少し食費を削減せざるをえない状況にあるという相談もありました。県外で一人暮らしをしている若者は帰省もできず、新たな人間関係の構築や出会いの機会も少なく、戸惑っているとの相談もありました。

ご家族やご本人が基礎疾患などをお持ちの場合、通常よりも外出や他者との接触に対して、不安が大きくなる傾向がありました。疾患や障害などから、子ども食堂やパントリー、居場所に出向くことが難しいケースもあり、定期的にご自宅やその近くの施設などでお会いするアウトリーチは、孤独感を緩和し、些細なことでも話しやすい機会をつくる重要なアプローチであると感じています。

ショートステイ事業

実施回数 21回 ／ のべ利用者数 35名
（2021年8月～2022年4月）

一時的に休息、食事、必要に応じて相談ができる生活支援・相談支援の場として宿泊機能を持つ子ども若者の居場所づくり事業

ショートステイの環境を整えることができました。睡眠や仮眠をとるためベッドを置いた静養室を設けることができ、必要に応じて宿泊できるようになりました。食事会は月に2～5回実施しました。学校や仕事、デイサービスを利用している方々も週末は一人で過ごすことや家庭内で居場所がなく気持ちが落ち込んでしまう場合もあります。特に年末年始や年度末など行事ごとがある時期は、精神的にも経済的にも、孤独を感じやすい傾向にあります。個別でお話をしたり、一緒に食事をとったりしてゆっくりと過ごすことで、気持ちが落ち着いたり、心身の不調や、学校や家庭の悩み事を少しずつ話せるようになっていきました。家族との距離を一時的にとることで落ち着いて話し合いができるケースもありました。

今後の課題

子ども若者のセーフティネットになっていきます。家族との関係が悪化した、自身の不調が続きつらいなど、コロナ禍以前から潜在的にあった課題が表出し、逃げ場がなくなった子ども若者たちからの相談があります。困難を抱える子ども若者が「自分を守ってもいいんだ」「休んでもいいんだ」と思える環境としくみをつくります。

PICK UP

りこのキッチン（子ども食堂）・フードパントリー

〈月2回 第2・4土曜日、場所：太田南コミュニティセンター〉

● りこのキッチン（子ども食堂）
年間開催回数 24回 ／
のべ利用者数 1080名

● フードパントリー
年間開催回数 24回 ／
のべ利用世帯数 312世帯

元利用者である若者が立ち上げた子ども食堂

居場所の元利用者である若者が、自分の得意なことをいかして、子どもたちに「ごはんあるよ。いつでもおいで。」を合言葉に居場所をつくりたいという思いから立ち上げた子ども食堂です。子ども若者が中心となって、準備や調理、お弁当のお渡しなどをおこなっています。夏には子ども食堂フェスタを開催し、チョークアートやみんなの作品展（絵など制作物の掲示）、科学実験教室などをおこないました。また、国際交流やダンス教室など、地域の方々と交流をおこないながら活動の輪が広がっています。８月と９月は活動場所のコミュニティセンターが閉館したため、フードパントリーを実施いたしました。

小学生から高校生、大学生の若い世代のボランティア割合が6割を超え、調理やお渡し、お楽しみイベントにも挑戦しています。子ども食堂を利用しているご家庭の方々に加え、ボランティアとして参加している子ども若者にとっても、活躍の場、地域の居場所となっています。

りこちゃんコメント

最初は一緒に手伝ってくれるスタッフはいるだろうか来てくれる人はいるだろうかと不安もありましたが、今では小学生から大人までわいわいと料理やフードパントリーの準備、イベントの準備をしてくれていて、本当に嬉しいです。自分がしてみたいから立ち上げたことが今では周りの支えもあり、みんなのものになっていきました。これからもがんばります。

相談支援事業

年間実施回数 152回 ／ のべ利用者数 152名

個別面談

不登校や発達障害、経済的困窮世帯などの背景を持つ
子ども若者やそのご家族との個別面談を実施

様々な背景にある子ども若者やそのご家族との個別面談を実施しました。子ども若者ご本人から直接相談が寄せられることもあります。家族や学校の先生や友人には言いにくい悩み事や困りごとについて話したいという傾向があり、対面や電話・LINE相談などを定期的におこないました。他者と関わる機会をつくりたい、同世代や似た境遇にある人と話してみたいなどの声もあり、どのように利用していただくことがご本人の心理的安全やご自身の持つ力を育むことができる伴走となりえるかを相談していきました。また必要や希望に応じて適切な医療や福祉とつながるサポートをおこないました。

訪問支援・同行支援

身近に頼れる人がいない子ども若者の
生活面のサポートや医療・福祉サービスとの連携

子ども若者の精神的・身体的状況の悪化の傾向がある際に、様々な事情から身近に頼ることができる人がいないケースがあります。ご自身で病院を受診したり通院したりする事が難しく、薬がなくなってしまったり、買い物に行けず食べ物がなくなってしまったりするケースがありました。医療や福祉サービスの利用を希望する場合には、その手続きのための移動や窓口での相談への同行や、モニタリングに同席しました。自傷行為や生活面の難しさが大きい時は、当団体のショートステイの利用につなげるなどの対策をとりました。

具体的な取り組み

- 身近に悩みや困りごとを相談できる人がいないと感じている子ども若者との個別相談、訪問支援
- ご家族との個別相談や情報共有
- 医療や福祉などにつながる際のコミュニケーションシートの作成
- 学校や病院、支援施設などとの連携
- 通院や手続き、買い物などの移動支援や同行支援

その他の事業

スタッフボランティア研修

年間実施回数 4回 ／ のべ利用者数 65名

スタッフやボランティアの参加人数が増えきている中で、チームビルディングを目的とした交流会や、自殺予防の勉強会、専門家を招いた子どもと大人の関り方の勉強会・座談会、同県内で居場所づくりをおこなっている団体への見学・勉強会をおこないました。気づきや戸惑いなどを共有する時間を設け、横のつながりをつくったり、関わる子どもたちの背景や強みをよく観察し自分たちにできるコミュニケーションはどんなものがあるかを考えたりしました。

不登校生徒に向けた通信制高校のパンフレット制作

香川大学医学部　鈴木裕美先生や地域の支援団体の方々とともに「ハイスクールプロジェクト」を立ち上げ、不登校状態にある中学生に向けた通信制高校や定時制高校の情報、先輩の声などが掲載されているリーフレットを作成しました。当団体のOB・OGにもヒアリングに協力してもらったり、リーフレットの表紙のイラストを担当したりしました。子ども若者とともに作り上げたリーフレットは県内の中学校全校に配布されました。

みんなの居場所

ま い

私にはASD、ADHDという発達障害の特性があります。こだわりが強かったり、聴覚が過敏だったり、感情をコントロールできず衝動的に行動してしまったり生活の様々な場面で困難を感じるため、学校でトラブルを起こしてしまったり、周りの人と上手くコミュニケーションが取れず悩んだりすることが多く、そのたびに「みんなと同じようになりたい」と思っていました。自分の気持ちを伝えることが苦手な私は誰にも助けを求めることもできず、学校の先生や友達、家族に迷惑をかけてしまう自分が嫌になり落ち込むことが増えていきました。頑張って参加していた授業は参加できないことが増え、教室に入ることもできない日もありました。

そんな時に出会ったのが「まなびやもも」です。最初はこども食堂のフードパントリーのボランティアに参加してmomonobarや学習会に参加するようになりました。まなびやももには10代から20歳前後の子どもや若者が集まります。ももには、障がいや病気があってもなくても、学校に行っていても行っていなくても、どんな状態でも受け入れてくれる人がたくさんいます。ももの運営をしているたかひろさん、えりこさん、子ども食堂でみんなに美味しいご飯を作ってくれるりこちゃん、momonobarでみんなを待っててくれるりなさん、居場所の時間にみんなと遊んでくれるゆってぃ、勉強を教えてくれたり、話しかけてくれたり、遊んでくれたりするボランティアの社会人や大学生、高校生、中学生、私のことを理解して受け入れてくれる友達がいます。

ももはとても不思議な場所です。体調が悪く数ヶ月間行けなかった時期もあったけど、高校3年生になって週に数回ももに通い続けて、自分の気持ちを言葉にするのが苦手な私も気づいたら自然と困っていること悩んでいることをえりこさんに話せるようになっていました。そして、学校では1人で行動し、周りの人の話を頷いて必死に聞いて頑張っていた私にも、一緒にゲームをしたり、自分のペースで話をしたりする友達ができました。また、少しずつだけど、ずっと無くなってほしい、治ってほしいと思っていた自分の特性と向き合えるようになってきました。

ももに来て、自分と向き合って一生懸命生きている人にもたくさん出会えたし、面白いことをして笑わせてくれる人にも出会えたし、私に悩みを話してくれて、私の想いを聞いてくれる人にもたくさん出会いました。弾き語りをしに来てくれた人やジュースで子供用のカクテルを作ってくれた人もいました。みんなでバーベキューをしたりお祭りをしたり花火をしたりもしました。

まなびやももは、みんなが自分らしくいられる大切な居場所です。

まだ、自分の特性に悩んだり、進路に困ったり、また学校でトラブルを起こしてしまったらどうしようと不安になったりすることはたくさんあります。でも、今はいつでもみんなを待っていてくれる居場所があります。

まだまだ社会では様々な場面で障がいのある人とない人で分けられていたり、お互いに理解し合うことが難しかったりします。私もまだ知らないことがたくさんあります。

私はもものように、日本や世界中を「みんながそれぞれの特性を認め合い、それぞれの特性を活かして、一緒に生きていく社会」にしたいです。もっとたくさんの人にまなびやももに来てもらいたいです。そうすれば、少しずつ、みんなが生きやすいようになっていくと思います。

この作文は、ももの利用者でもあるまいちゃんが書いてくれたものです。
作文を読んだ感想や応援メッセージがあれば、ぜひまなびやももまでお伝えください。
（掲載について本人の許可を得ています）